

養育者からの子ども中心の関わりと真の他者体験との関連

——逆境体験の有無に着目して——

堀 恭輔・上原 ゆず・阪無 勇士(目白大学 心理学部 心理カウンセリング学科)

連絡先:堀 恭輔 kyskh23pc@uni.mejiro.ac.jp

キーワード:小児期逆境体験 (ACE), 子ども中心の関わり, 真の他者体験



問題・目的

小児期逆境体験(以下, ACE)は人生全般の心身の健康に悪影響をもたらすことが問題視されている(Felitti et al, 1998)。ACE経験のある子どもほどケアの効果が高い関わりが求められており, ACEのある子どもに有効な関わりとして子ども中心の関わりが注目されている(日本総合研究所, 2024)。子ども中心の関わりとは「子どもの声を聴きながら子どもにとって最も善い関わりとは何であるのかを考へ続ける大人が用いるケアの効果が高い関わり」のことであり(阪無, 2024), 子どもの安定型の愛着形成, トラウマ症状のケア, 問題行動の改善などに役立ち(阪無・石村, 2019), 虐待対応の第一線である児童相談所, 一時保護所においてもその有用性が認められている(阪無他, 2023)。子ども中心の関わりは虐待を受けた経験のある子どものケアのニーズを満たす効果があることから, ACEによる悪影響についても予防できる可能性が示唆される。

また, 臨床的な治療技法であるAEDP (Accelerated Experiential Dynamic Psychotherapy) では, ケアのニーズを汲み取るような関わりを用いる他者は真の他者と呼ばれ, 真の他者から受ける関わりは治療的な効果をもたらすことが明らかとなっている(Fosha, 2000 門脇・森田訳, 2017; 菅原・石村, 2019)。子ども中心の関わりと真の他者体験はいずれも体験した者に対して治療的な効果を導くことから, 子ども中心の関わりは真の他者体験と同様な機能をもつことが示唆される。しかし, これらの概念の関連性は明らかにされていない。また, 真の他者体験を導く具体的な関わり方を明らかにすることは, 支援の現場においては非常に有用な資料となることが考えられる。

そこで, 本研究では各尺度の関連性および, 子ども時代に養育者から子ども中心の関わりを受けた経験がある者ほどACEの有無に関係なく真の他者体験が得られやすくなることを明らかにする。

方法

- 調査協力者** 関東圏の大学生219名 (男性66名, 女性153名, 平均年齢18.99±1.90歳)
- 質問紙構成** ①フェイスシート, ②真の他者体験:Fosha, D.(2000)を元に伊禮・石村(2022)が作成したものを使用, ③子ども中心の関わり尺度:阪無・石村(2019)が作成した尺度を大学生向けに一部修正したものを使用, ④ACE尺度:Felitti et al(1998)をもとに谷地(2020)が作成したものを使用した。
- 倫理的配慮** 児童相談所一時保護所における虐待臨床の経験が豊富な大学教員から研究計画, 実施, 分析などの指導を繰り返し受けた。回答は統計的に処理し, 個人情報保護に努めた。

真の他者体験とは (Fosha, D., 2000) 伊禮・石村(2022)を参考

真の他者体験とは, 苦しい状況にあるときに, 辛さを和らげようとそばで温かく見守り, 時には心温まる言葉がけや必要な働きかけをしてくれる存在(真の他者)がもたらす体験のことである。その「**真の他者**」は, 過去に辛い体験をしてから心の奥底で抱えてきた苦しみにも寄り添い, 少しでも辛さが和らぐようにと, 一緒にいてくれる人のことである。

例

相手に辛い状況を話した時に, 親身になって受容的に話を聞いてくれた。自分にとって深刻で思いつめてしまうような内容でも相手は動じることなく, まっすぐに私の話を聞いてくれたので心から共感してくれたと感じた。"受け入れてもらえた"という喜びを感じ, 心が満たされた。

結果① ACE該当者数と真の他者体験

Felitti et al(1998)はACEを4群に分けており, ACEの該当数が多い者ほどその悪影響は深刻であり, 4つ以上に該当する者は**ハイリスク群**と呼ばれている。

Table1のACE該当者数の割合をみると, 0に該当する者は65.2%であり, 4以上に該当する者は6.0%であった。

日本におけるACEを用いた19,965名を対象にした大規模調査(三谷, 2022)によれば, 0は61.6%, 4以上は2.8%であることから, 本結果で得られた4以上のACE該当者は**2倍以上**であった。

Table2をみると, これまでに会った真の他者の人数は1人が35.6%と一番多かった。また, まだ真の他者と出会えていないように感じている該当者0の人は27.9%であった。伊禮・石村(2022)では大学生の57%が真の他者体験を経験しているが, 本研究では72.1%が真の他者体験を経験していた。

真の他者の内訳は, **友人**が一番多く, 二番目に**母親**, 三番目に**父親**であった。また, ACE4以上に該当するハイリスク群で最も多い真の他者は**友人**であった。子ども中心の関わりをした養育者の内訳は, **母親**が9割以上であり, 最も多かった。

ACE該当数	人数(n=219)	割合
0	138	63.0
1	34	15.5
2	21	9.6
3	14	6.4
4	6	2.7
5	3	1.4
6	1	0.5
7	2	0.9
8	0	0.0
9	0	0.0
10	0	0.0
合計	219	100.0

会った真の他者の人数	人数(n=219)	割合
0	61	27.9
1	78	35.6
2	40	18.3
3	31	14.2
4	6	2.7
5	2	0.9
6	0	0.0
7	1	0.5
合計	219	100.0

結果② 真の他者体験と子ども中心の関わりとの相関

真の他者体験の項目と子ども中心の関わりとの相関係数を算出した。相関分析の結果から示される主な傾向を以下に示す。なお, 具体的な数値はTable3の通りである。

- ①ACEの該当数が多い者ほどストレスを感じやすく, 子ども中心の関わりを体験する機会が少ない。
- ②子ども中心の関わりを受けた者ほど真の他者体験を経験している。
- ③子ども中心の関わりに含まれるすべての関わりは, 真の他者体験を導く真の他者体験を導くような関わりと同様な機能をもつ傾向がある。

属性	真の他者体験					子ども中心の関わり							合計
	ストレス	受けた関わり	感情体験	波及効果	合計	解決的な関わり	受容的な関わり	教育的な関わり	成長的な関わり	強制的な関わり	回避的な関わり		
真の他者体験に関する項目	.22**	.25**	.27***	.13†	.31***	.02	.14*	.12†	.15*	.12†	.14*	.12†	
真の他者と出会った時期の数	.18*	.15†	.26***	.11	.28***	.08	.19**	.20**	.14*	.21**	.12†	.17**	
真の他者と出会った時期の数	.16*	.11	.16*	.17*	.18*	.05	.08	.08	.09	.11	.07	.09	
体験したACEの合計	.34***	-.08	.11	.14†	.09	-.29***	-.38***	-.36***	-.33***	-.40***	-.29***	-.33***	
真の他者体験	.13	-.13	.27***	.40***	.44***	-.15†	-.18*	-.15*	-.08	-.15*	-.08	-.12	
感情体験	.27***	.46***	-.54***	.89***	.13†	.15†	.11	.25**	.26***	.33***	.21**	.34***	
波及効果	.40***	.63***	.54***	-.63***	.09	.05	.03	.12	.12	.03	.03	.10	
合計	.44***	.58***	.89***	.63***	-.17*	.22**	.19*	.33***	.31***	.04	.06	.27***	
子ども中心の関わり	-.15†	.26***	.13†	.09	.17*	-.44***	.52***	.51***	.50***	.29***	.26***	.68***	
解決的な関わり	-.18*	.27***	.15†	.05	.22**	.44***	-.78***	.73***	.81***	.50***	.51***	.88***	
受容的な関わり	-.15*	.27***	.11	.03	.19*	.52***	.78***	.69***	.73***	.61***	.51***	.88***	
教育的な関わり	-.08	.36***	.25**	.12	.33***	.51***	.73***	.69***	.74***	.39***	.40***	.84***	
成長的な関わり	-.15*	.33***	.26***	.12	.31***	.50***	.81***	.73***	.74***	.49***	.53***	.87***	
強制的な関わり	-.08	.21**	-.06	.03	.04	.29***	.50***	.61***	.39***	.49***	.63***	.56***	
回避的な関わり	-.12	.21**	-.03	.03	.06	.26***	.51***	.51***	.40***	.53***	.63***	.53***	
合計	-.18*	.34***	.19*	.10	.27***	.68***	.88***	.88***	.84***	.87***	.56***	.53***	

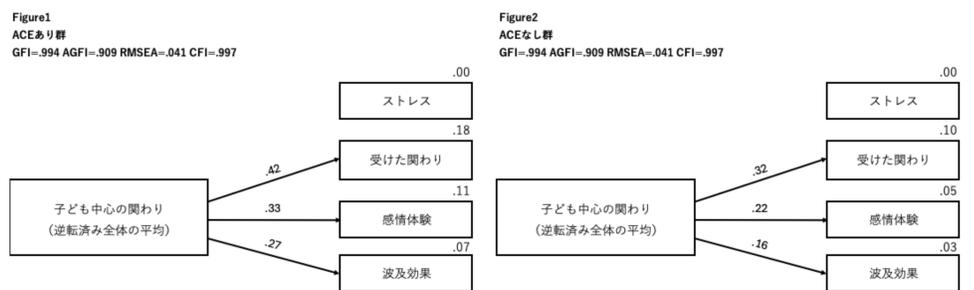
結果③ ACE該当者数ごとの各変数の平均値の差

Felitti et al(1998)を参考に, 回答者をACEの該当数に応じて4群に分け, 4群間の平均値の差の検定を行った。分散分析の結果から示される主な傾向を以下に示す。なお, 具体的な数値はTable4の通りである。ACEに該当する数が多い者ほど, ①**ストレス**を体験しやすく, ②**真の他者体験**や, ③**子ども中心の関わり**を体験しにくい傾向が明らかとなった。

属性	ACE4群				F値	分散分析の結果					
	該当なし群(0) (n=107)	該当あり群(1) (n=23)	該当あり群(2-3) (n=24)	該当あり群(4-) (n=9)							
真の他者体験に関する項目	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD			
真の他者と出会った時期の数	1.99	1.57	1.85	1.64	1.89	1.53	2.67	1.72	.87		
真の他者と出会った時期の数	1.43	1.26	1.15	1.05	1.03	1.01	1.67	1.56	1.59		
真の他者と出会った時期の数	1.33	1.06	1.15	1.18	1.00	.94	2.17	3.81*	1.2*	3-4-	
真の他者体験	3.40	.91	3.36	.73	3.99	.92	4.55	.51	7.85***	0<2-3<4-1<4-	
感情体験	3.74	.82	3.65	.80	3.74	.81	3.45	.81	.44		
波及効果	3.96	.71	4.04	.57	4.00	.58	4.38	1.30	1.05		
合計	3.21	.79	3.42	.68	3.46	.81	3.53	.79	1.30		
子ども中心の関わり	3.78	.58	3.78	.49	3.84	.52	4.02	.79	.59		
解決的な関わり	4.46	1.05	4.01	.90	3.90	1.10	3.36	.87	6.76***	0>2-3<4-1>4-	
受容的な関わり	4.69	1.05	4.45	1.37	4.10	1.33	2.68	1.09	12.52***	0>2-3<4-1>4-	
教育的な関わり	3.89	1.21	3.35	1.18	3.23	1.25	2.14	1.12	10.05***	0>2-3<4-1>4-	
成長的な関わり	4.20	.94	3.78	.96	3.58	1.07	3.01	1.14	8.68***	0>2-3<4-1>4-	
強制的な関わり	4.82	.98	4.33	1.02	4.09	1.35	3.08	.89	13.70***	0>1-2<3<4-1>4-	
回避的な関わり	4.56	1.61	4.09	1.17	3.91	1.52	2.94	1.70	5.42**	0>1-4-2<3<4-1>4-	
合計	5.25	1.08	4.98	.97	4.81	1.20	3.54	1.48	9.40***	0>1>4-2<3<4-1>4-	

結果④ 子ども中心の関わりが真の他者体験に及ぼす影響(パス解析)

子ども時代に養育者から子ども中心の関わりを受けた経験がある者ほど, ACEの有無に関係なく真の他者体験が得られやすくなることを明らかにするために, 子ども中心の関わりを説明変数に, 真の他者体験を目的変数に設定して多母集団同時分析を行った。分析対象者は真の他者体験を経験した大学生164名(男性43名, 女性121名, 平均年齢18.98±2.08歳)である。結果から示される主な傾向を以下に示す。なお, 具体的な数値はFigure1, Figure2の通りである。①ACEの有無に関係なく, 子ども中心の関わりを受けた者ほど真の他者体験を経験しやすい。②ACEなし群よりACEあり群の方が子ども中心の関わりによって真の他者体験を経験しやすい。



考察・今後の課題

考察 本研究では, 子ども中心の関わりはACEの有無に関係なく真の他者体験を引き起こすプロセスが確認された。菅原・石村(2019)によれば, 真の他者体験は感情的苦痛がある者に対して大きな治療的变化を生じさせることから, 子ども中心の関わりはACEがある者の感情的な苦痛をケアする効果があり, その結果として, 真の他者体験を引き起こすと考えられる。結論として, 子ども時代に受けた子ども中心の関わりは, その後の人生の中で真の他者体験をもたらす者と出会いやすくさせる効果があると考えられる。

今後の課題 今回使用した子ども中心の関わり尺度(阪無・石村, 2019)は子どもを対象に作成したものであり, 大学生への適用が難しい項目があった。今後は項目を再検討する必要がある。また, 結果を一般化するためにも, 調査人数や対象者の年齢等の範囲を拡大することも重要である。加えて, 本研究ではACEあり群とACEなし群の分類で分析を行ったが, トラウマ等の臨床的な課題を有する者や既にケアを受けた者が混在すると考えられる。子ども中心の関わり臨床群への適用を検証するために, 今後は調査協力者を選定して調査を行う必要がある。また, 真の他者体験を導く具体的な関わり方を整理し, 子ども中心の関わりの実用性を高めるためには, 質的調査の実施が望まれる。

COI開示

日本子ども虐待防止学会 第30回学術集會 かがわ大会 発表者:堀恭輔, 上原ゆず, 阪無勇士 演題発表に関し, 開示すべきCOI関係にあたる企業などはありません。